

映像音響メディアと民族音楽学



MusiCam 会議の会場となったスペインのヴァリャドリッド大学（2014年11月、寺田吉孝撮影）。

国際伝統音楽学会（International Council of Traditional Music、略称 ICTM）は、民族音楽学と民族舞踊学における世界最大の国際学会である。1947年に設立され、現在会員数1400名強、世界112カ国に委員会または連絡員をおき、2年ごとに世界大会を開催している。傘下に20の研究グループが設置され、それぞれが定期的に国際集会を開いている。昨年カザフスタンで開催された第43回世界大会で、「映像音響民族音楽学」（Audiovisual Ethnomusicology）をテーマとする新しい研究グループの発足が正式に承認された。

映像音響メディアは、音や動きなど文字媒体による描写・分析が困難な対象の記録に優れているため、これまでも音楽・芸能の研究のツールとして頻繁に用いられてきた。また近年は、安価で高性能な映像機器・編集ソフトなどの登場により、高度に専門的な訓練を受けずとも映像記録や番組制作が容易になり、民族誌映画の制作が活発に行なわれている。

人類学では映像人類学が下位分野として確立され、研究活動における映像メディアの位置づけが再検討されている。制作者と取材対象者の関係が根本的に見直され、それを反映する新しい映像制作手法が開発されつつある。しかし、映像人類学における議論は、かならずしも音楽・芸能という対象の特質を十分に考慮したものではなく、またおおむね映像作品の制作を前提としているために限定的でもある。このような意識をもつヨーロッパの民族音楽学者

のあいだで、音楽研究における映像音響メディアのあり方を継続して議論できるプラットフォームの必要性が話題にのぼるようになった。彼らの拠点の1つであるスペインのヴァリャドリッド大学は、映像を用いた音楽研究の会議 MusiCam を2010年より毎年開いており、そこで研究グループ立ち上げの気運が生まれた。2014年には第5回目の集いを国際シンポジウムとして開き、ヨーロッパ地域外からも参加者を募って、国際的なグループの設立に向けた議論が行なわれた。

筆者もこのシンポジウムに出席し、研究グループの検討課題を講論するパネルに参加した。ここでは2つのテーマにしぼって紹介したい。第1は、映像資料の再利用である。民族音楽学者は、研究の記録のために映像を撮り続けてきた。収集された資料は、多くの場合映像の素人である研究者が調査中に撮影したもので、公開を念頭においていなかった。しかし、年月が経つにつれ、亡くなった演奏家や消滅した演奏スタイルなど、そこにしか残されていない記録の重要性に気付く。アーカイヴズ資料に「新しい命を吹き込む」ことはできないのか。メディア研究者のルイ・オリヴェイラ（ポルトガル）は、1990年代に収集されアーカイヴズに保管されていた映像資料を再利用して、現在のソースコミュニティへの聞き取りなどを追加して番組を制作するプロジェクトを立ち上げた。その経験から、プロジェクトを成功させるには、民族音楽学者、メディアの専門家とソースコミュニティの3者が緊密に連携することが重要であると主張した。また、チリの音楽を20年以上にわたり研究したクラウディオ・メルカドは、自身が収集した1,300時間にもおよぶ映像音響資料が消失する危惧を抱き、研究者とソースコミュニティの双方に利便性の高いアーカイヴズを設立した。今後、このように個人が収集し保管している資料の保存と有効活用は、映像音響民族音楽学の重要課題の1つとなるだろう。

第2のテーマは、TV番組への研究者の参画の可能性である。研究グループのリーダーであるレオナルド・ダミコ（イタリア）は、コロンビアのTVドキュメンタリー番組に、民族音楽学者として参加した経験を報告した。研究者はがいてTV番組に批判的であるが、一般大衆に与える影響が大きいことから、番組制作に積極的に関わり、その枠組みの中で果たしうる役割は何かを議論すべきだという。同様の観点から、ペルーの聖カトリカ大学で民族音楽学研究所を主宰するラウル・ロメロは、国営のTV放送でドキュメンタリー番組制作に関わった経験を報告した。民族誌映画との番組制作上の相違点を分析したうえで、TVドキュメンタリーも「民族誌的眞実」を伝えており、目的によっては有効であると主張する。TVや他のマスメディアとの協働の可能性は、民族音楽学的な視点をより広く紹介する手段として、今後も模索される必要があるだろう。

研究グループの第1回目の国際シンポジウムが、2016年8月にスロベニアのリュブリアナ市立博物館で開催される予定であり、今後の活動が注目される。



南米各地で人気のあるクンビアのルーツを探るTV番組。ナイジェリアでの取材中、取材班がエコモ（太鼓）を演奏すると現地の女性が踊りだした（2012年8月、Vincenzo Cavallo撮影）。

文 寺田吉孝

ワシントン大学音楽部民族音楽学科博士課程修了。PhD。現在、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授。音楽研究における映像音響メディアの役割に興味をもち、特にマイノリティ集団の音楽文化に関する番組制作に関わっている。監修番組に『怒——大阪浪速の太鼓集団』（2010）、『大阪のエイサー——思いの交わる場』（2003）など。